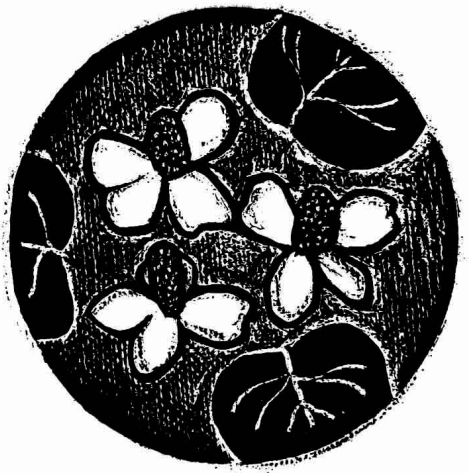
魔の沼

天沢退二郎

の沼（ぬま）

沢退二郎



筑摩書房

天沢退二郎（あまざわたいじろう）
1936年，東京で生まれた。
東京大学フランス文学科卒業。詩人，フランス文学者。現在，明治学院大学文学部助教授。
著書に『光車よ，まわれ！』（ちくま少年文学館）『闇の中のオレンジ』『オレンジ党と黒い釜』，詩集『時間錯誤』『夜々の旅』，評論『宮澤賢治の彼方へ』などがある。

913.6／259ページ
23cm／A5判

魔の沼

1982年5月20日初版第一刷発行

著者　天沢退二郎

発行者　布川角左衛門

発行所　株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町2－8
電話 東京（03）291－7651（代表）
郵便番号101－91　振替東京6－4123

印刷　明和印刷株式会社

製本　和田製本工業株式会社

（分類）8093（製品）88039（出版社）4604

© T. Amazawa, printed in Japan

もくじ

第一部　沼の夢

1　ルミの見た夢……3
2　夢ふたたび、三たび……8
3　エルザと夢の場所へ……12
4　学級PTA……20
5　オレンジ党集まる……32
6　あやしい煙……38
7　京志と土神のじいさん……50
8　源先生の呼び出し……58

第二部　沼の王

9　キャンプ決行……69
10　テントできる……75
11　沼の出現……86
12　ブラックスワン……94
13　古井戸と土神……102
14　沼の水源を求めて……108
15　白衣の男……117
16　沼の王の出現……124
17　消えた建物……138
18　逃げてきたゆきえ……151
19　うすあかりの道……167

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

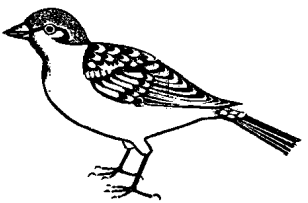
第三部　沼の戦い

20　ススキ武者……185
21　ルミさらわれる……202
22　二組の来客……212
23　沼の王の娘……222
24　戦いの開始……229
25　危機一髪……244
終　章……255
あとがき……259

装幀・さしえ　林マリ

第一部

沼(ぬま)の夢(ゆめ)



1　ルミの見た夢

霧がたちこめていた。しらちゃけた、暗い深い霧が、まわりからしめつけるようにおしよせて、視界をいよいよせばめてくるようだった。

でも、はじめからそんな霧があったわけではない。ルミが、六方新田のバス停へ出る小みちのわかれ目で、何かを捨てるか運ぶかするためにこっちへ曲がったときには、空こそくもってはいたけれど、畑のむこうの小さな杉林も、その左側に立ちならんだ分譲住宅のむれも、かすんだりせずにはっきり見えていた。じきに小みちが下り坂になって、杉林も分譲住宅も夏草のかげに見えなくなり、それから、ルミのよく知っている沼地をよこぎって、どれほど歩いただろう——とにかく決して、今まで来たこともないところへ迷いこんだはずはない。

それは、こんなに深い霧がたちこめれば、よく知っている野原でも迷うかもしれない。けれどついさっきそのへりを通ってきたシイのしげみは、六方神社の西のへりだった。ここはあそ

こからそんなに遠いところではない。だいじょうぶ、知ってる場所なのだ。
それではいつから霧が出てきたのかというと、はっきりいつから、どの辺にさしかかった時からとは思い出せない。でも、だいたい霧というものは、いつのまにか、どこからか、気がつくともう立ちこめているものではないだろうか？　だからそのことはルミも悩みはしなかった。ただ、しめつけてくるようなその霧の中でルミは、何かへんだ、何かおかしい、と思いはじめていた。においだろうか、何かへんなにおいがするだろうか？
ルミは小さくフンフンと鼻を鳴らしてみた。これは、においだろうか？　たしかに鼻の内側がかすかに痛む――いや、痛むといってはいいすぎだわ、でも……
もちろんにおいはあった――夏草のにおい、それもアレチノギクやヤブカラシや、甘ったるくてむしむしするこの季節の花や葉のにおいなら、してあたりまえだから、とくに気にもならなかったけれど、そのいつものにおいの、すぐむこう、というか、すこし奥の方に別なにおい、もっと正確にいえばにおいに似た何か、においに似てにおいでないものが、たしかに感じられた。
それはやはり、前兆だった。前兆だったんだわ、とルミはほとんど口に出してつぶやいた。なぜなら、目の前に水が、水のひろがりが、つまり、沼が現れたからだ。
現れたというのもじつは正確でない。目の前にみるみる現れたのか、それともさっきからそこにあったのが、霧のせいでかくされていたのか、後になってルミにはどちらとも決められな

かった。ただ、まさしく目の前に沼があったのだ。

もちろんそこは、沼などあるはずのところではなかった。霧ですこしばかりみちに迷いかけてはいたかもしれないが、そのあたりは畑と荒れ地と、近ごろ植えたばかりの小松林と、その中にちらほらと農家や、安っぽい建売住宅があるだけ、どぶ川と呼べるほどの小川さえなかったはずだ。あと二キロほど北へ行けば、印波沼の端が入りこんでいるし、西へ一キロほど行くとはじまる森の奥になら奇妙な人工の沼があることも知っているけれど……

しかしそんなことをいっても何にもならない。とにかく目の前に、すぐ足もとから、沼がはじまっていた。黒々とした水はピチャピチャと小さな波をたてて、すぐ五十センチさきの砂利にうちよせ、さっきからルミの鼻を刺激していたしめっぽいにおいが、やはり目に見えぬ波になって、いまやルミの顔全体にさわーっ、さわーっと吹きよせていた。

ほんとうにこれ、沼かしら？　ルミはまだ疑ってみた。なぜなら、印波沼でも、森の奥の沼でも、長沼でも、沼の岸はたいていびっしりアシが生え、その先にはガマが生いしげり、そのまた先にやっと水面がはじまるのがふつうだ。それなのにこの沼（？）の水ぎわは、いきなりふつうの夏草のしげみになっている。これはおかしい、どこかインチキくさい、あやしい……。

水面が、むこう、どのへんまでつづいているかは、霧のためにさだかでなかった。でもこれは、相当なひろさだ、ちょっとやそっとの出水なんかじゃなさそうだ。

そしてもうひとつ、ふしぎなことは——そういえばそうだわ、とルミはいまさらのように気

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

がついた――沼の水は黒かった、それもまさに真っ黒だった！

よく、天候のせいや、水深のため、あるいは、深い暗い森の中の川など、ほんとうは透明な水が光線のかげんで黒く見えることがある。けれど、これはそうではない。なかばまだ信じられなくて、ルミはかがみこんで両手にさっとすくいとってみた。たしかにそれは、墨汁よりも黒かった。

そればかりでなく、ルミの手のひらの上で、黒い水がいきなりうごめいた！　気のせいだったかもしれない。けれどルミは思わずぞっとして、両手を狂ったようにふってその黒いしずくをはねおとすと、ひといきに走り出したいのをこらえて、すこしずつあとずさりした。あわてて走ったりしたら、黒い水が、沼そのものが、あっというまにこっちへ押しよせてきそうでこわかったのだ。夏草に足をとられかけながら、五、六歩あとずさりして、それからくるっとふりむくと、もうあとも見ずにかけ出そうとした。その瞬間、目のすみに、何か赤いもの、真っ赤なものがちらとひっかかった。それがまたいいようもなくふしぎで、ルミはほんのいっとき黒い沼のこわさを忘れ、その赤いものにじっと目をこらした。道のわきの、草むらの中に、ぽっとにじんだようなその赤が、ちょっとの間ぼやけていて、すっとあざやかなかたちになった。それはうす黒い小っぽけなお地蔵さまの首にかかった、赤いよだれかけだった。

その赤と、ルミとの間に、白い霧がどんどん流れてきて、その霧におしながされるようにルミは夢からさめた。でも、そうしてさめかかりながら、そのよだれかけの赤い色は、霧のむこ

marie

うにいつまでも、夢からさめるまで、いや、さめたあともまだすこしの間、見えつづけていた。

2　夢ふたたび、三たび

その沼の夢を見たのは、この一度きりではなかった。

はじめて見たのは七月に入ってからだったろうか。あの水の黒さがあまりになまなましくて、何となくいちどあの荒れ地のところへ行ってみたい気がしていたけれども、ちょうど学期末の試験がはじまって、さすが成績のことなど気にしないルミも、毎日学校からまっすぐ家へ帰って勉強していたから、家とちょうど反対側にだいぶ歩かなければならない六方新田の方へは足が向かなかったし、オレンジ党の仲間たちとその話をする機会もなかった。それに、だいたい、夢のはなしというものは、ひとに聞かせてもどうもよくつたわらない気がするし、ひとに聞かされても、ふしぎさやおもしろさがよくわからなくてじれったくなるものだし……。

そして、その大事な試験がまだ終わらないうちに、また夢にあの沼が現れたのだ。

あしたはルミの不得意な算数のテストで、いつも九時に寝るのを十一時までトレーニング・ペーパーなどくりかえしさらってから床に就いたあと、つぶった目のうら側にしばらくは数字や数式がちらちらダンスをしていたのだけれど、見た夢はぜんぜんちがっていた。

ちらちら——といえばたしかに、ルミの体はちらちらゆれている、ゆれているようで、ふと気がつくと、あの沼にうかんだボートの真ん中に、何ともいごこちの悪い気分でこしをおろしていたのだった。そして、やはり、霧がたちこめていた。

ルミはそれでも、そっと舟べりに手をかけて水をのぞきこんだ。やはり黒い水だった。それも、この間とちがって、水は大きく波うっていた。風があるわけでもなく、海の波のように沖からよせてくる波でもない。何かが水の中であばれているか、それとも、ぐりぐりと水をわけてせりあがろうとしているのか、とにかく波はいよいよ大きく、もりあがりわきかえるようだった。

何ものかしら？　ルミはしっかり舟べりにつかまって、ゆれるボートを両足でおさえつけようとした——そんなことしたってむだだとは思ったけれど。

そのとき、むこうから声がきこえた——というより、正確には、きこえたような気がした。あぶない、そこで待ってろよ、とその声はいっているらしかった。目を上げると、霧の中から、ボサボサの髪をした男の子が、けんめいにボートをこぎながらこっちへ近づいてくる。見たことのない、でも見たことがあるような気もする、ルミよりすこし年上の、中学生らしい少年。

誰かな、と思ったとたんにぐらっとまた体がゆれた。あぶない、たすけてお父さん！　と叫んだとたんにまた体がぐらっとゆれて、でもそれは誰かがゆさぶっているのだった。

「こら、ルミ、もう七時だよ、起きろ」

ルミの肩をゆすっているのはお父さんだった。ルミははね起きた。しまった、いつもは必ず六時半におきるのに、ちょっと寝るのがおそいとこうなんだから……。ルミはねまきのまま、とりあえず台所へとびこんだ、その瞬間に、いまの夢のことはスッと忘れてしまった。

ところが、三度目に沼が夢に出てきたのはすぐまたその晩のことだったのだ。なぜか苦しかった。息苦しかった。あたりは暗くて、ほとんど何も見えない。そして、ルミの足はどこにもついてなくて、ゆらりゆらりと漂っている――ここはあの沼の中なんだ、とルミはすぐ思った。こんな、苦しいのいや、はやく出なくちゃ、うき上がらなくちゃ。

でも、ルミの手足はしびれたように動かない、苦しい……。

どういうわけか、むこうに四角い窓のようなものが見えてきた。古い枕木を組んだような、四角いわくのむこうに、人のかたちが見える。ふたりいる。何か話しあっている。

こっちを向いてるのは、李エルザだった。エルザは、ルミに背を向けた誰か大人のひとと話をしている。

ゆらゆらとルミは近づいていった。だんだんエルザの声もきこえてきた。はっきり、いよいよはっきり。

ところが、声ははっきりきこえるのに、エルザが何をいっているのか、ルミにはわからないのだ。なぜ？　エルザは何をいっているの？　何語をしゃべってるの？

たしかに、ルミの知らないことばをはっきり発音しながら、エルザがいきなりこっちを見てさっとルミを指さした。

相手の大人が、はっとしたようにこっちをふりむいた。その顔は……あら、源先生、千早台小学校の源先生だわ！　なぜ？

夢はそれっきりだった。なぜなら源先生がすばやく手をのばして、窓のシャッターをおろしてしまい、何も見えなくなって、ルミは息苦しくふとんを頭までかぶったままのかたちで目をさましたからだった。

まだ夜明け前だった。部屋の中はうす暗く、お父さんの寝息がかすかにきこえている。ルミはしばらく仰向けになったまま、ゆっくり息をつきながら今の夢を思いかえした。こんどはすぐに忘れたりはしない。それより、いまの夢からヒモをたぐるように、きのうの朝の夢をもはっきり思い出した。そしてさらに、十日ほど前にみた、沼の最初の夢をも。

夢にはよく、予言が含まれているという。夢のしらせとか、正夢とかいうことばもある。ごく近いあいだに三度も見たことで、ルミの胸には何ともしれぬ不安がにじみ出てきた。前にもルミは、夢の中で人に声をかけたら、あとでその子に声がきこえたといわれたことがある。

黒い沼の、三つの夢は、どういう意味なんだろう？　いや、意味はないのかもしれない。で

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com